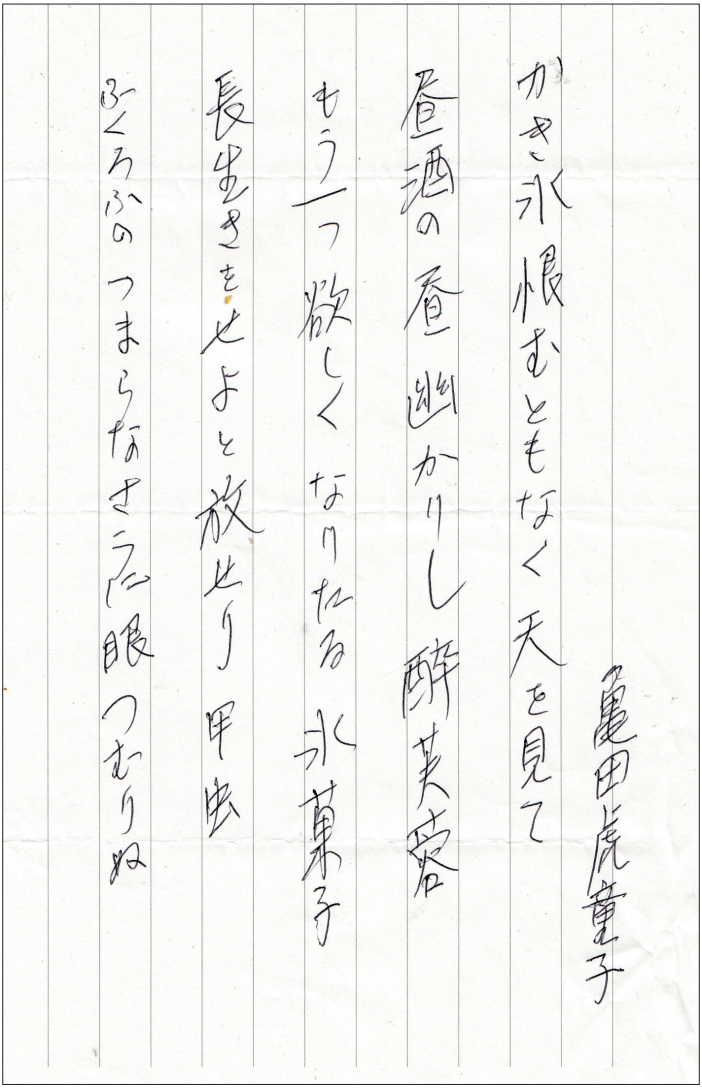
あさ 10

2024

石艸岳人

雪蚓 龜蛇



亀田虎童子

かき氷 恨むともなく 天を見て

昼酒の 昼酒かりし 酔芙蓉

もう一つ 欲しくなりたる 氷菓子

長生きを 七よと放せり 甲虫

ふくろふの つまらなさうな眼つむりぬ

『あを』原稿・亀田虎童子

あを

十月集

坐・誹

佐藤　竹僊

踏切に「ふみきりちゅうい」田水張る

浮いてこいのやうな白鳥梅雨の濠

萍をいくつか購め水を觀る

けふからは僕の玉蟲死んだから

影持たぬ水引草の心だて

朝顔に花のなき朝ほたる草

バス停は「住宅前」と落し水

こころよすると秋の小川のひとり言

水中にもやもやのあり後の月

水引草

沸騰する

秋川　泉

太陽は沸騰西瓜はいびつ
抱へたる西瓜の臍の大きけり
旧友に声かけらるる大施餓鬼
回向する十人の僧大施餓鬼
みそ萩を水の子に振る若き僧
疲れたと今年限りの水争い
空を切り悪童放つ青大将
捕えたる蛇の皮剥ぐ小学生
葦簾張り男がひとり眠り入る
青桐の花降る夜の散歩道

蓬平温泉

七郎衛門吉保

炎中や千歩届かぬ万歩計

カステラで夏負け知らず黒田節

語り部も聞き手も減りて敗戦忌

流灯に載せたき地震と大嵐

稲の丈高く実りの多寡如何に

幾万の足軽の如芒原

「蓬平」寝湯の耳元虫すだく

深山道車も避ける毬の栗

入道と鰯の混ざる秋の空

小型かな与党野党も台風裡

冬瓜

篠田純子

不忍の風鈴二千いつせのせ

空調服身体(からだ)を抜ける風は秋

お通しに冬瓜煮もの長居せる

男梅雨ダンプの跳ねをシャーッと受く

ビビアンリー程のウエスト夏痩せて

空室

篠田大佳

みんみんとひびく晩夏がやつてきた

ゆく夏やひねもす壁の白き部屋

厨より鍋鳴る音や夏休

金曜の子どもプールはお休みです

雑貨屋の去る空室へ西日かな

盆踊中止の夜に残る暑さ

段取りの脳とろけたる残暑かな

満足のいく買出しへ秋驟雨

盆の月

須賀敏子

朝一番塩辛蜻蛉と擦れ違ふ

野仏にお干菓子供へ盆支度

茄子の馬此処を曲がれと言う様に

眠れずに窓を開ければ盆の月

訪ねれば淡紅色の木槿垣

木槿散る何を頼りに八十路かな

８月やオリンピックのパリ遥か

不忍池

都築繁子

機嫌良き人と話せり蓮見台

蓮の花青き花托の直立す

蓮の葉のうねりの向こう見え隠れ

蘇るあの頃八月十五日

ひと夏の楽しき思ひ五輪果つ

グランドの眩しき投光夜の秋

遅々とせる台風疎まし夕支度

高原

長崎桂子

ぐずついて十五日おくれ梅雨に入る
露けしや足速な雨傘多彩
帰り道民家を飾る半夏生
雷鳴降るごとしいっときの恐怖
今年また東の窓に家守くる
太陽(ひ)のきたり家守いづくか早きえて
高原を埋め尽くしをりカモミール
紫陽花まつりや寺院のすみずみを
草いきれ排気ガスの道の熱気
土用餅御供し安泰祈る

默祷

森　なほ子

打ち水が日課隣家の爺ありき
行水も洗濯もして木の盥
一枚の木の葉と埃日向水
打ち水を子らに頼めばびしょ濡れに
置いてきし打ち水日向水の日々
消え逝ける季語に默祷夏深し
黒々と雨の日暮れの木下闇
蓮華升麻初秋の風に鈴振れり
スーパーに薪束売れり避暑の町
子も孫も帰りて盆の終はりけり

初秋

赤座典子

アスリートの弾ける笑顔秋うらら

祝祭にひととき消える秋暑かな

台風接近埃拭き取るヘルメット

秋出水より天変地異の始まれり

大き栗乗る釜めしと決めにける

九十九折帰りは速し葛の花

山古志の空は広々雲の秋

敗戦忌孫にもちゃんと語らねば

ふるさと

変わりゆく東京

篠田大佳

僕のふるさとは東京ですが、大人の暮らしの中に放り込まれて、都市の生活をドライに過ごすところがありました。そんな東京を書物で辿ると、昔は水の都市だったことがわかります。実地に水の名残を求めても、水路はすでに蓋されていて、水の都市を想像することが年々難しくなっています。また、最近は街ひとつまるごと再開発する地域もあって、都市の記憶がなくなりつつあります。

故郷は故郷ならず狂ひ花　鎌倉喜久恵

妹や生れ故郷は青時雨　須賀敏子

故郷は何もなけれど墓参　鈴木多枝子

ゴールデンウイーク故郷とはハーモニカ　堀内一郎

雪催遠き故郷に居るやうな　山荘慶子

古里は秋刀魚は干物で食べる物　大日向幸江

退職の日のふるさとの桜かな　篠田大佳

ふるさとの春の祭の日と思ふ　森なほ子

解体のふるさと思ふ遠花火　都築繁子

天気図の古里の辺は春の雪　森なほ子

古里は鼈甲飴の中の泡　佐藤竹僊

復員の故郷無になり敗戦忌　長崎桂子

荷を解いて故郷の若布かほりたる　秋川　泉

故郷はありがたきかな鱧料理　早崎泰江

烝収集

蜆ほどふくらみ明日の螢草　佐藤　竹僊

剥げてゐるウィンブルドンの夏芝　赤座典子

湯上がりて温泉卓球玉の汗

遺跡あり強き雷雨と夢のあと　秋川　泉

トゲトゲとつかむ手の中油虫

梅雨の雷プラチナ色を撒き散らす　七郎衛門吉保

礼状に笑みの見えたりサクランボ

口開けて竜舌蘭の花仰ぐ　篠田純子

竜舌蘭の花百年の夢うつつ

渋谷交差点香水と酸欠と

七夕やしあはせだから願ひ書く　篠田大佳

この夜をひとまづ夜涼としておかう

鳩までも日陰に集ふ炎暑かな　須賀敏子

蒸暑し着替へのシャツはインド綿

沸くやうに人集ひくる盆踊り　都築繁子

夏の雲クレーン居座る夜のビル

十薬の花の総立ちょろこばし　長崎桂子

打敷の褪せない朱色盆用意

子ら遊ぶ背景いつも百日草　森なほ子

晴れ間縫ひ産卵急ぐ梅雨の蝶

喜孝抄

八月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

老笑ふ核のボタンを見せ合うて　　佐藤竹僊

漫画の面白さ。老というにはまだ少々若いけれど、どちらも寒い国の、仲良しの二人ですね。最近ますます友情を深めているらしい二人ですが、この句、核のボタンをまるでおもちゃのように得意げに見せあって、笑っています。その笑顔が無邪気な子どものようで、世界の大人達は困ってしまうのです。（なほ子）

鼻唄はいつもの軍歌汗の父　　佐藤竹僊

昭和の時代には日常の労働と地続きで軍歌が歌われていたことが、戦後生まれの人間には俄には信じられないことです。大正生まれの僕の祖父も、街宣車から軍歌が聞こえてくると、一緒になって歌っていました。若い世代にとって軍歌は、関心がなければ全く接点がないものです。戦争の言葉に自覚がない現代だからこそ、労働の汗のにおいと軍歌が結びついていた時代があったことは記憶に留めておきたいです。（大佳）

垣越えし紅薔薇なれば香を盗む　　森なほ子

果実権を思い出しました。おそらくは、隣家の薔薇が垣根を越えて、作者の家の領域に入って

きた「果実」で、その香りを「盗んだ」という理屈になるのでしょう。漂う花の香りはお金に換算できないですが、「盗んだ」香りは背徳のにおいがします。一方で、垣を越えたのだから不可抗力、利益を享受してもいいでしょうと、利益を正当化しているようにも読めます。罪悪感と正当化のせめぎ合いを読みます。（大佳）

足早に過ぎてしまひぬ馬と山車　　森なほ子

祭を俳句に詠むのは難しいとおもつてゐる。この句は「山車」とあるから、お祭とわかる位、祭から一歩引いたところがおもしろい。祭の行列を待つ。暑いかもしれない。長い間立ちんぼで待つてゐる。遠くからざわめきが聞こえてきて、いよいよ待つてゐた行列が来た。待ち疲れた周りの人と共に構へる。ところが眼前を馬が、山車が、あつといふ間に通り過ぎてしまつた。三々五々散つていく人々に混じつて、「あつけなかつたなぁ」と思いつつ帰路につく作者。（喜孝）

三世代線香花火の根競べ　　赤座典子

お盆か夏祭りか、祖父母、子、孫の三世代が揃い、皆で線香花火に興じている。いつか黙って自分の花火に見入っている。どの花火も一段落して小さな火花をいつまでも散らしている。皆、消えるまで見ている、この根気強さはこの一族共通の気質なのかと眺めている作者がいる。（なほ子）

七曲り毎に張り出す栗の花

赤座典子

七曲とは「道や坂が幾重にも折れ曲がつてゐること」とある。七曲りを固有名詞なのかと疑問を持つたが、さうではなかつた。その道または坂が曲がるたびに、栗の花が張り出してくる。花の中でも、栗の花は趣の薄い、いや無いに等しい花のひとつではないかとおもつてゐる。その栗の枝が道を曲がるたびに張り出してくる。典子さんは自動車かバスに乗つての事ではあるが、興のない七曲りだと嘆いてゐるといふ。

といふ私の勝手読みであり、さう読むことで、この句の「張り出す」が生き生きと働き出すと思つた。（喜孝）

おむつの子はっぴはちまき山王祭

秋川　泉

夏の山王祭の鳳輦行列を見に行った句と思われます。行列では、乳幼児までお祭りのムードを演出します。報道によると、今回六年ぶりの開催とあり、人手を集めるのに苦労したり、段取りがわからない若い人がいたかもしれない、などの内情があったそうです。背景事情を加えて読むと、行列の人々のなんとか祭を盛り上げようという気持ちや、祭りを楽しもうという気持ちが沿道にまで伝わってきたのを感じます。（大佳）

§

「山王祭」の句といひながら、山王祭の歴史など無視しての読みぶりを面白く思つた。顔に薄化粧をした、法被鉢巻姿の可愛らしい祭の子、おむつがぷつくりとしてこれも可愛らしい。中七すべてひらがなで通したのも弾んだ心持ちを表してよい。このことをこの子は長じるに従つて頭から消えていくのは不思議でならない。今の子は写真や動画でたつぷり親やジジババが残してくれてゐることだらう。（喜孝）

大潮の潟の半里の跣足かな

七郎衛門吉保

大潮の時に姿を現した潟を半里（２ｋｍ）ほど裸足で歩いた。このような句意だと思います。水を含んでいてちょっとひんやりした感覚、人の立ち入れない営みが、裸足から感覚を通して伝わってくる半里の散歩。一歩一歩にいろいろな命の物語が描かれそうです。（大佳）

§

大潮で出来た干潟。その干潟を半里も歩いたといふ。舗装路ではない。経験はないが、歩きやすいとは思はぬところを２㎞も…。吉保さん、ますますの健脚ぶりである。この句は下五の「跣足かな」に重さがかかつてゐる。干潟の広さを、天候に恵まれてゐることを、句外で知らしめつつの「跣足かな」である。今人は跣足で半里も歩く機会は少ない。吉保さんにしてももちろんのことであらう。そのやうな跣足に感じる干潟の感触である。「跣足かな」のかなは「跣足」といふ

ものへの思ひ入れである。干潟の風景句ではなく「跣足」に焦点を当てた俳句である。（喜孝）

まくなぎ御一行オーバーツーリズム　　篠田純子

まくなぎがぐるぐる回っている様子が団体旅行と重なって、オーバーツーリズムを起こしていると読みました。オーバーツーリズムとは、観光客が増えすぎたことで地元住民の生活に支障が出ることを指すようです。もうちょっと踏み込むと、まくなぎの数が多すぎて、道ゆく人のストレスが増したり、当のまくなぎたちのストレスも強くなっていると読みました。（大佳）

廊下奥に三年寝太郎梅焼酎　　篠田純子

俳句の中に「廊下」が出てくると、《戦争が廊下の奥に立つてゐた　渡辺白泉》を想起する。私、廊下のある家に住む機会を逸したが、寺院の長い廊下は別として、田中藤穂さん宅の廊下を親しく思ひ出す。この家を秋川泉さんから現況を知らされ、時が迅速に流れてゐることを感じる。

梅焼酎を三年寝かせてゐるとも読めるが、三年寝太郎は三年寝太郎。梅焼酎は梅焼酎と読んでみたい。純子さんは読者をある一点に導かうといふ意志は薄いと思ふ。民話の中の三年寝太郎が廊下の奥に梅酒とともに蹲つてゐる不思議な景が浮んできた。ちなみに純子さん手造りの梅酒は絶品である。（喜孝）

干渉をせざるが父の日の感謝　　篠田大佳

父の日を息子が詠むのはあまり多くないと思う。父みずから、または母や娘からというケースが多いようだ。この句の父はまださほど老いてはいないだろう。従って、息子と父の勢力争いはまだ終わっていないのです。故にお互いの平和友好を保つには、干渉しないで感謝することと。かくて平和は保たれます。（なほ子）

俳句史に残らぬ時代氷菓子

篠田大佳

戦後だけでも俳句界にひとつの問題で論争が豊かに交されたことがあつた。第二芸術論であつたり社会性俳句であつたり。今の俳句界を眺め回して凪のやうだといふことを、「俳句史に残らぬ時代」といはれた。又は傑出した俳句作家が出現しないといふことも含まれてゐるかもしれない。そのことが良い事なのかだうかは私にはわからない。掲句の「氷菓子」はウイット溢れた季語である。昨年末『戦後俳句史 nouveau 1945—2023三協会統合論・筑紫磐井』が刊行された。（喜孝）

夏草の伸び放題にまだ空き家

須賀敏子

牧野富太郎博士をモデルにしたドラマが放映されていた頃、「世の中に雑草という草はない」という博士の言葉が宣伝されていました。我が家の近所の空地にも草がすくすく育っているのですが、よく見るといろいろな品種が背を伸ばしたり花を咲かせたりしています。作者の近隣にも空き家があって、人の手が入っておらず、草が伸びきっているようです。とりどりの夏草の青々し

さと空き家の寒々しさが対照的です。（大佳）

人多くされど静かな菖蒲園　　須賀敏子

梅や桜、紅葉や萩と花を賞でに名所、名園に出かける人は多い。多いが賞でる花によつて人々の雰囲気が違ふらしい。桜と菖蒲でははつきりその違ひがある。花見の浮ついた人々、菖蒲園では考へられぬことである。

「柚子の花二階に夫とキャンバスと」は〝幸せとは〟といふ題の見事な答の俳句。（喜孝）

長尾鶏の剥製の尾館涼し　　都築繁子

博物館だろうか、長尾鶏の剥製が飾られている、または展示されている。長尾鶏は特別天然記念物で、尾は八メートルくらいという。尾羽が、生まれてから一度も抜け変わらず伸び続けるので、この長さになるのだそうです。私も昔、どこかで見た記憶があるのだか、長い黒光りの尾が美しかった。（なほ子）

羽田行く機影真上に濃紫陽花　　都築繁子

午後三時から七時、北北西から板橋・北・練馬・豊島・中野・新宿・渋谷・目黒・品川・大田の各区を通過して羽田空港に降りる。繁子さんの板橋では高度１３５０ｍ。品川天王洲アイルで

４５０ｍと降下する。飛行機は平時、人や物を運ぶが、戦時には大活躍する。繁子さんは飛行機の腹をどのやうな気持で仰ぐのだらう。「羽田行く」は「羽田へ行く」とした方が自然。（喜孝）

小麦刈る三重の農家や衆も笑ひ　　長崎桂子

おおらかな句ですね。「三重の農家」という大ざっぱな捉え方、「衆も笑ひ」という下五の省略も面白いです。なんとなく古歌の趣を感じました。収穫の喜びが伝わって来るよう。（なほ子）

梅雨に入るヤングケアラーに手厚い法　　長崎桂子

今月は桂子さんから〝ヤングケアラー〟を学んだ。戦後、親を亡くした子供たちだけで生きていかねばならぬ環境に置かれた。『火垂るの墓』で今に語り継がれてゐる。桂子さんの俳句は物語の中の話でない〝今〟の話である。六月十二日に「子ども・子育て支援法等の一部を改正する法律」において、「家族の介護その他の日常生活上の世話を過度に行っていると認められる子ども・若者」として、国・地方公共団体等が各種支援に努めるべき対象にヤングケアラーを明記した。」。自分がヤングケアラーとは思はずに頑張つてゐる子供たちに少しでも光が当たればと勉強して思つた。（喜孝）

季語あれこれ「露草」

佐藤喜孝

月草の、うつろひやすく思へかも
我が思ふ人の、言(こと)も告げ来ぬ　　坂上大娘

露草は万葉集では「月草」と詠まれてゐる。同集に九首収められてゐる。この花で染めた色の褪せやすさと、花の咲く時間の短さに心を重ねて詠まれ、花そのものへの興味は見かけない。馬琴編の歳時記（岩波文庫）に、「月草、露草　時珍曰、鴨跖草、花を碧嬋花といふ。」と書きだし「巧匠、其花を採り、汁を取て画色を作す。青碧にして黛の如し」と書き収めてゐる。補注に「月草の色見えそめし雨寒し　暁台」を載す。和歌と誹諧の意識の違ひがわかりやすい。葉室麟の『螢草』はヒロインに仕える主人公の妻との交流に露草を介した。「菜々は佐知が儚い露草であるように思えた。そっと手を伸ばして露草に触れてみた。ひんやりとした手触りが生きている清々しさを感じさせる。菜々は露草に触れながら、いつの間にか泣いていた」。

わが『あを』の露草はだう詠まれてゐるか。お楽しみください。

つゆ草の色に衰へありにけり　桂子
暁の露草の露なないろに　桂子
露草の青色滲む押葉かな　裕子
露草の朝の一滴眞珠玉　桂子
露草や小さき生きもの集ひをる　桂子
露草の豆電球が昼灯す　桂子
石佛や露草の露消えやらず　尚子
露草のきらと瑠璃色露葎　慶子

六月の蒲公英露草羊雲　東亜未
露草のすがれてあはき星のいろ　純子
しばらくは露草そっとそのままに　泰江
露草やコンビニの朝始まれる　石動
露草や知らぬ日本語増えてゆく　藤穂
暁光や露草の露呼応する　桂子
露草の藍濃くすがし朝かな　桂子
露草をよけて行きけりアシツクス　石動
くきくきと機嫌の悪い露草の　幸江
刈草に混じる露草馬の口　なほ子
露草や寝不足の眼を楽します　桂子
露草の群れ咲きにけりほほゑまし　桂子
外壁に「撤去ＯＫ」ほたる草　典子
ほたる草足形土器のこぶりにて　竹僊
悔い残す別ればっかり蛍草　純子
夕べにはそっと花閉づ蛍草　泰江
蛍草縁切寺の黒格子　藤穂
葦の辺に瑠璃色ゆらす蛍草　泰江

崩れ初む草野にありて蛍草　理和
木道の傍に色濃き蛍草　典子
蛍草わきに守宮を葬むれり　理和
蛍草ガス灯一台庭に立つ　理和
二年振り際立つ青の蛍草　桂子
螢草壺に無聊の宵灯す　志づ
蜆ほどふくらみ明日の螢草　竹僊

桂子さんが多くこの花を詠まれてゐる。今夏体調を崩された由、ますますのご自愛を。「露草の豆電球が昼灯す」はしげしげと露草に顔を近づけてゐる桂子さんの姿をも浮かばせる。

夜もすがらかさねし袖は白露の
　よそにぞうつる月草の色　藤原家隆
面影はなほ有明の月草に
　ぬれてうつろふ袖の朝露　藤原雅経
鬼怒川の岸のつゆ草打ち浸り
　ささやくことは我はきけども　長塚節

あとがき

今月の表紙

大判版画（57×75㎝）です。作者は武井石艸岳人。最初に俳句を教へてくださつた先生の作品です。先日、先生のご息女様と電話で話す機会がありました。その折思つたことですが、俳句に限らず初学の師が偶々人格に問題のある人であつたら、その道から外れてゆく人も多いことと思ふ。石艸先生に出会つたことが、今も俳句にすがつて暮らしてゐることを不思議に思ふ。そして先生を紹介していただいた日本画家、野島一真（俳号・苔樹）さんにも改めてありがたく思つたことでした。

原稿のお願ひ

前にも同趣旨でお願ひしたことがありましたが再度の、そして常時、気の向いたときに書いて下さるやうお願ひ申します。

お願ひする文章は自作・他作を問はず俳句を落語でいふ枕扱ひにし、その俳句を導火線として文章を書いてほしいのです。よろしくお願ひ申し上げます。

いうれい蜘蛛にその後は遭はず借り家屋　竹僊

この句のその後にもつと小さい幽霊蜘蛛をやはり家の中で二度見た。子どもであらうか。逃がしてやらうとするもすぐ見失ふ、まさに名前の如くである。自転車でぷらぷらほつつき漕ぎをしてゐたとき、葉の上に真つ黄色な物をみた。花かと近づくと蜘蛛であつた。せせり蝶を摑まへてゐた（安土蜘蛛？）。家の中では蠅取蜘蛛が活躍してゐる。

（喜孝）

二〇二四年十月号
発行日　十月二十二日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／福井美佐子・ティリ　エイマ
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）